

《研究ノート》

サイバースペースへのアプローチ

—CMCをどう思考するか—

安 川 一

1 CMCの夢想

マクルーハンが著わした「地球村」という夢想は、インターネットの出現以降、いよいよ現実味を帯びたかのように口にされることが多い。彼によれば、新技術の浸透は人間環境を変容させ、ことに電気技術の浸透は「すべての人間活動に同時的『場』を再創造」して地球を時間・空間的に収縮させて“村”のようなものにしてしまっている。いまや「われわれは部族の太鼓が響きわたる、狭く窮屈な単一の空間のなかに住んでいる」¹⁾。

なるほど、インターネットが具体化してみせるCMC (Computer Mediated Communication=コンピュータを用いたコミュニケーション) は、マクルーハン風の夢想を現実化しているかのようである。

CMCは、物理的空間を相対化した。つまりそれは、距離的・空間的な制約を超えた情報の伝達ないし共有の可能性を増大させた²⁾。それはまた、身体的・社会的拘束の相対化ということでもあった。かつてなら身体的・社会的障害によって、階級・階層によって、あるいは言語的文化的分化によって分断されていた諸世界間に、障壁を超えたやりとりがおこる機会が増大した。その意味でCMCは、世界の収斂を促す技術のように思える。つまりそれは、コミュニティを、部族的ないし空間的近接のメタファーから関心による集結へ、あるいはコミュニケーションにそって拡張された共同態へ、と発想転換させうる力であるかにみえる。

時間的制約の相対化はさらに顕著である。スティヴン・ジョーンズは、ハロルド・イニスの言い方を借りて、インターネットに「時間に向かうバイアス (傾向性)」があると述べた³⁾。イニスによれば、石版のヒエログリフには時間への、つ

まり長時間の持続に向かうバイアスが、パピルス紙には空間への、つまり距離的隔絶を超えた伝達に向かうバイアスがあるという。CMC とヒエログリフはあまり似ていない⁴⁾。けれども、永続性への指向とは同時性の拡張ということであり、それが CMC によって実現されているのも確かなことだった。すなわち、CMC における一対一の非同期的交換（電子メール、等）、多対多の非同期的交換（電子掲示板、ニュースグループ、等）、一対一なり多対多なりの同期的交換（チャット、MUD、等）、あるいは同期的もしくは非同期的な情報の提示と受容（FTP、WWW、等）、等々は、様々な形で同時性を拡張し、定着させ、利用可能にした。CMC は、情報の伝達ないし共有を、即時的にも蓄積的にもおこないうる、その意味で利便性の高い同時性のコミュニケーション領域として生成したのだ。そして、既存の社会的時間や内的時間意識とは異なる、あらたな時間意識モードへの再編が起きているかもしれない（CMC をとりこんだ生活を続けている限り、際限なく「オン」であり続けねばならない、同時性を維持し続けねばならない、といった）。

夢のこのような現実化は一方で様々な歓迎を受けている。関心と広範で活発な参加にもとづく新しいコミュニティの生成、既存国家・社会の枠にとらわれない経済・サービス活動、地方行政や教育や医療やメンタル・ケアといった社会サービスの拡充ないし既存システムの補完（阪神—淡路大震災や日本海重油流出事故の時の情報ボランティアの活動の数々を思い起こしてもいい）、地球規模の人的交流の活性化、等々。

2 収斂か分散か

しかし、もちろんのこと、CMC による「世界の収斂」は必ずしもそのまま歓迎されてはいない。異なる政治イデオロギーの流入を警戒する中国のインターネット規制をあげるまでもなく、経済的力動としては期待しつつも、反体制的情報の流通を厄介視して、CMC を常にコントロール下におこうとする既存国家は少なくない。アメリカの GII 構想が情報産業の地球規模の掌握をめざす国家戦略であるように⁵⁾、CMC は覇権争いの舞台でもある。ブロック化的な対抗指向も、未開地に対する支配競争指向も現れているし、さらには、CMC に具現されているアメリカ的なものの侵入を地域的アイデンティティにとっての脅威とする見方も盛んに提示されている⁶⁾。英語圏的なコミュニケーション文化の席卷による、文化的多様性の圧迫への

危惧である。もとより、「世界の収斂」には国家という既存枠組みと相容れない部分がある。CMCを支える現実的インフラストラクチャーは国家によって投資され、管理されているものである一方、そこで生まれる情報交流や経済活動が国家枠組みを超えた動きをみせはじめ、現実と体制の整合性が危うくなっているところがある⁷⁾。インターネット上でポルノや暴力や反政府思想などに関する一国での規制がほとんど無意味になっているという事実が、その事例である。

夢想を支える現実を目を転じた時に情報格差やリテラシー格差として定式化される課題も、やはり無視できない。コンピュータをはじめとする情報機器や情報インフラへのアクセス・利用と、情報リテラシーやその養成能力とをめぐる社会的格差の存在／拡大傾向の問題視と、その社会的影響力への懸念である。コンピュータの潜在能力を評価するがゆえの、あるいは社会全体の情報化という現実認識ゆえの、新たな不平等生成因の出現とその波及効果に対する警戒である。もちろん、これらはCMCそれ自体の問題ではない。既存の社会的格差生成／維持のシステムが、CMCというリソースを活用し始めているというだけのことである。しかし、「世界の収斂」がCMCによって促進されるなら、そして、CMCの利用可能性と活用能力に社会的格差があり続けるなら、「世界の収斂」とは、それが情報民主主義やデジタル民主主義などの言葉とともに語られるものであるだけに、総体的価値剥奪を伴う、たちの悪い夢想であり続けるのだろう。

それだけではない。CMCは、それ自体が「収斂」とともに「分散」への指向性をもつものでもある。なるほど、回線と端末さえあればたちどころに交信できるという意味で距離は無意味化されたかもしれない。しかし、このことを逆に言えば、コミュニケーションしない限り、私たちはむしろ互いに分散を強めるということになる。現行の地方行政サービスや選挙制度が必ずしも市民の意思やニーズを代理的・代表的に組み上げるものでも育むものでもないように、市民生活を地理的近接メタファーで塗り固めることの無理はしばしば明らかである。けれども、だからといって関心による集結が、単なる島コミュニケーションの相互孤立をもたらしきないという保証はどこにもないし、それはむしろ現状といっていい。コミュニケーションのコミュニティであるCMCにおいては、その実際において、コミュニケーション行動そのもののあり方が、よりいっそう問われることになるのだろう⁸⁾。ここにおよんで、メディア特性論にばかり流れがちだったCMC論は、方向の再吟味を迫

られる。

3 CMC の現実

では、私たちはCMC とのかかわりでどのようなコミュニケーション行動をし、その限りでどのような社会的関係を生成・維持しているのか、つまりは、どのようなコミュニティを実現させているのか（ないし実現できる可能態にあるのか）、まずは、こうした課題に対してもっとも蓄積の多い心理学的研究の趨勢を概観してみる。

集団作業という文脈において対面的コミュニケーション（F2F）とCMCを対比的に検討することが多かった初期の心理学的研究では、しばしばF2Fに比べてCMCが劣っていることが指摘されてきた⁹⁾。つまり、CMCは、自発的な発言を参加者に等しく増加させるが、その一方で合意形成や課題遂行には適さず、「flaming」と呼ばれる言語的攻撃行動を誘発しがちで、良好な安定の人間関係を発展させることはまれである、という。

CMCは社会的関係形成を促しがたい、というこのような“発見”は、社会的存在感モデルにもとづくメディア特性研究の主張とも¹⁰⁾、reduced social cueモデル（社会的手掛かり減少モデル＝RCモデル）にもとづくCMC研究の主張とも一致する¹¹⁾。前者は、テレビや電話を題材にして、相手についてそのメディアを通して利用可能な視覚的手掛かりの数と、メディアを通して感じられる相手の存在感（親近感や直接感）との相関を主張した。同様に後者は、CMCで使用できる社会的手掛かり、さらには文脈の手掛かりがF2Fでは限定されてしまい、正確かつ豊かな、また穏当なコミュニケーションが阻害されるという。つまり、なんらかの集団力学に則って抑制的に発言を継起させるといったことがなくなり、平等で一面活発なコミュニケーションがなされるものの、その発言は非個人的で、否定的で、場合によっては極端なものになりやすい、という。

こうして、これらの研究はCMCが社会的関係の生成・維持に寄与しない可能性を示唆した。豊かで親密で良好な社会的関係は、対面的場面において、非言語的メッセージや多様な外見がもたらす様々な手掛かりやコミュニケーション・チャネルを充分活用したコミュニケーションを重ねてこそ生成・維持されるものであるという。このとおりなら、マクルーハンの夢想はまたも夢想のまま終わることになる。



しかしながら、近年のCMC研究の動向をみると、こうしたRCモデルにもとづく知見はしばしば否定されている。総じて言えば、RCモデルは、メディア特性(とくに情報伝達のバンド幅)を偏重してCMCの多様なあり方を見損なっており、メディア特性のいかにかわらずコミュニケーション過程に関ってくる社会的文脈の影響を捉えていない¹²⁾。どんなに課題遂行指向的なCMCでもある程度の感情的経験はついてまわるし、手掛かりの乏しいテキストのみによるCMCでも、文章のスタイルや間合いを頼りにして印象は形成される¹³⁾。あるいは、課題遂行場面のCMCでは男性のメッセージが、レクレーション的場面では女性のメッセージが注目されがちだという¹⁴⁾。そこには、日常の他で用いられているのと同様なコミュニケーション技法が動員されて、わずかな手掛かりから相互的カテゴライズと相互理解がなされているし、他と同様な社会的文脈の影響が見られるのである。そして、RCモデルは、何より実証的研究による検証が得られがたいのだという¹⁵⁾。たとえば良好な安定的関係も、CMCを長期にわたって続けている環境では充分に発達しうる¹⁶⁾。

要は、CMCは通常のコミュニケーションと大差ない社会的営みであり、またRCモデルが指摘する欠陥も長期にわたってCMC経験を重ねていけば補うことができる、というのが最近の研究の到達点のようだ。実験心理学的のマインドをもって追試や批判を試みるのでない限り、私たちは自分自身のCMC体験に照らしてこれらの知見の受容の可否を吟味・判断することになるわけだが、それはここで直接に課題となることではないし、また、それ自体それほど意味ある事柄でもない。もとより、仮にCMCについてネガティブな評をするのに十分な材料が集められたとしても、それと一致しない、豊かな体験の場としてのCMC事例を見つけだすことは容易だろう。しかも、CMCのメディア特性がどのようなものであれ、また、現時点のCMC行動特性がどのようなものであれ、私たちがCMCになじんでいけば(他のメディア・コミュニケーション、たとえば電話コミュニケーションがそうだったように)他の社会的場面と順接的なコミュニケーション文化が定着していくだろうことは想像に難くないのだ。

4 匿名性と自己呈示技法

こうして、他のメディア・コミュニケーション同様、おそらくは自明な与件とし

て日常生活に埋没していくのだろう CMC について、メディア特性に特化させた関係づけによって不用意に期待や危惧を示す必要は感じない、それが筆者の姿勢である。たとえば、先に述べたように、社会学的な CMC 研究においてしばしば言及される情報／リテラシー格差にせよ、CMC をめぐるジェンダー差異（ほとんど触れられなかった）にせよ、それらは CMC を焦点にして活性化した既存の社会的現実ではあっても、CMC それ自体の問題ではない。なぜ活性化するかを分析し思考することには意味があるだろうが、それを不用意にメディア特性に結びつけることに必然性をみつけるのは難しだろう。

では、CMC は（少なくとも筆者が依拠する社会学的思考において）扱う価値のない事柄か、とりあえずは「否」である。筆者は3つの方向性が有意義だと考えている。

第1は、CMC を社会的相互行為過程のフィールドワークの場、それも条件コントロールとデータ化が比較的容易なそれとして活用するという方向性である。とりわけ、相互行為秩序の形成過程に動員される社会的技法を観察し、分析するための場としてそれは有効である¹⁷⁾。

発端としてジョアンの事例がいいだろう¹⁸⁾。大学生だった彼女は、交通事故で半身不随になり、そのうえ言葉も失って絶望のうちに入院生活を続けたのだが、友達からある日、コンピュータとモデムとコンピュサーブの ID をもらった。それ以後、彼女はネットワークを日々の生き甲斐として、一方で自分の生活を語り、他方で様々な人の相談を受け止め、いくつかのラブロマンスさえ経験していく。そうやって CMC 世界の「セラピスト」として著名になっていった彼女は、障害をもった人の CMC による社会参加をドラマチックに具現した人ということになるが、この彼女が実はネット人格であって、“外の 3D 世界”で彼女を演じていたのはアレックスという男性で本職の精神分析家だった。

これはまず CMC の匿名性ないし操作的自己呈示の可能性を表現する事例と見ることができる。このことを CMC のメディア特性的自由さないし気楽さ、もしくは無責任さの現れととらえるなら、先の RC モデルと同様の発想をすることになるが、そのことはひとつの帰結にすぎない。むしろ、アレックスはどのようにしてジョアンになり得たか、を考えてみるべきだろう。すなわち、利用できる視覚の手掛かり、社会的手掛かりが限られている、その意味で匿名的である状況で特定の形でコミュ

ニケーションを進行させようと思うなら、むしろその人の行動はより規範的にならなくてはならない。アレックスは、自分のシナリオを現実化するために、語彙や表現スタイルや間合い、発想の仕方、話題提供の仕方など、若い女性のそれとして受け止められるだろう手掛かりを慎重に配置しながら、注意深く“ジョアン”的言葉を演じる。彼が自由にネット人格であろうとするなら、彼はプレイヤーとして、より多くの制約のなかでふるまうことになる。

もちろんそれは、外の3D世界でも同様に行われている営みである。私たちは日々、男/女として、親/子、あるいは教師/生徒として、意図的にであれ習慣的にであれ自己呈示に励んでいる¹⁹⁾。慣習化された社会的方法論を、習得したやり方で動員しながら、自分自身という社会的対象を、それにふさわしい(と思う)社会的カテゴリーのもつて提示している。違いがあるとすればせいぜい、CMCでは演技が露呈したらネット人格を消去すればいいが、3D世界ではおりることが難しい(意図的偽装をしているのでないならば)ということくらいだろう。動員している技法は両者とも同様と考えられる。とすれば、CMCは自己呈示過程をそのまま観察することのできる場になる。匿名的であるとか、操作的自己呈示が可能であるとか、そうしたことのある種倫理的な事柄が問題なのではなくて、そうしたことを実現している相互行為的技法の分析が、まずは検討できる課題である。そして、このような社会的文脈の影響を濃厚に反映したコミュニケーション場である以上、CMCが簡単に「世界の収斂」に結び付くものではなく、むしろ分散傾向を示しやすいものであることは、容易に想像できるだろう²⁰⁾。

5 背後仮説と思考実験

第2は、対人関係ないし相互行為というものに対して私たちがもっている背後仮説の検討である。

RCモデルを裏に読んでいけば、私たちが対人関係、特に親密なそれについてもっている背後仮説が明らかになる²¹⁾。当初CMCでは充たし得ないと思われていた、親密な関係の条件をめぐる仮説である。まずそれは、長期的安定的な良好な相互指向の関係に、つまりは友情・結婚を念頭においた関係に偏重していた。またそれは、近接のメタファーを動員していた。つまり、親密で良好な関係とは、「近い」関係を意味していた。さらにそれは、口頭コミュニケーションに偏重しつつも、同時に

身体的事柄・非言語的事柄との連続性に重きを置いていた。すなわち、身体的近接、対面的相互行為、会話、そして非言語的コミュニケーションを、対人関係の本質的過程として強調するのが、この背後仮説なのだった。そして、いずれも CMC には備わっておらず、それゆえ CMC から親密で良好な人間関係などは生じないとされたのだった。

けれど、この背後仮説は、なにゆえこれらを親密で良好な対人関係の本質とするか、については何も語らない。それらは、「かくあるべし」という規範ではあっても、またそうした対人関係を記述するラベルではあっても、関係の親密性それ自体を説明するものではない。対面的相互行為を規範的モデルとして、その特徴らしきものをもって親密性を指し示すことにした、と、そういうことでしかない。しかもこのことは、コミュニケーションを発想する時にも暗黙の前提視されがちな事柄である。私たちがコミュニケーションを発想する時、しばしばそれは身体的近接状況における対面的で親密なコミュニケーションをベースとして発想し、実際のそれをこれからの偏差として考えがちなのである。これがひとつの偏向であることは言うまでもない。F2F は、原初的モデルというよりも規範として、コミュニケーションをめぐる私たちの思考を縛っている²²⁾。

しかし、先に示したように、CMC も十分に時間をかけてやりとりを重ねていけば、「親密で良好な」関係の形成は可能だという。だとすれば、CMC を直接の検討対象とすることによって、親密で良好な人間関係について、あらたな記述が可能になるかもしれない。少なくとも、こうした背後仮説がなにがしか重荷になったり、違和感を生じさせたりしている現状から多少なりとも離脱する契機にはなるだろう。

そして第3は、身体、アイデンティティ、コミュニティ、空間といった一般的で、その意味で基礎的な概念たちを、CMC を通して再構成してみる、という方向性である。

社会学的発想をするなら、「コミュニティ」という概念は、そもそも記述的であると同時に規範的であり、またイデオロギー的である²³⁾。3D 世界のそれと信じられて（なじまれて）きたものがそうであったのと同じように、CMC 世界のコミュニティもまたそのとおりである²⁴⁾。そして、この記述的で規範的でイデオロギー的な、しかし社会生活そのものであるとともに世界の内外を分かちつ梓組みたるものとしてのコミュニティは、それとのかかわり（もしくは対抗）において個人あるい

はアイデンティティというものの性格を規定してきた。身体や感情といったものに性格と位置を与えたのもそれ、空間・時間といった社会的与件をそのようなものたらしめてきたのもコミュニティだった。では、CMC というフィールドを得た私たちは、それらをいかなるものとして目撃することになるのだろうか。

CMC 世界が地理的近接のメタファーを脱した、関心による集結としての、コミュニケーションの総体そのものとしてのコミュニティを構成したのだとすれば、ことによると個人という発想はぼやけるのかもしれない。近接メタファーからなる既存のコミュニティが、同質性を標榜しつつ実際のところ人々の現実的差異性を相互確認させ、調整させる枠組みであった(それゆえ個人を析出させた)のに対して、関心によって集結したコミュニティはむしろ差異性を見えづらくする傾向にあるのかもしれない(見えたとたんに怒りだす)。人々が島のコミュニケーション世界で内的に差異を感じず、さりとて島の外に向かって交流を求めるでもない、そんな「世界の収斂」とはほど遠い光景も垣間見えるのかもしれない。ともあれ、具体的にフィールドワークしつつ、思考実験を重ねてみよう。

- 1) マクルーハン, M. (森常治訳)『グーテンベルクの銀河系——活字人間の誕生——』みすず書房, 1986, p. 52. マクルーハン, M. (栗原裕・河本仲聖訳)『メディア論——人間の拡張の諸相——』みすず書房, 1987.
- 2) ここで「情報の伝達ないし共有」とは、ジェームズ・ケアリーがコミュニケーションの伝達モデル/儀礼モデルを区別したことに依拠する言及である。Carey, J. W. 1989 *Communication as Culture: Essays on Media and Society*. Unwin & Hyman.
- 3) Jones, S. G. 1997 "The internet and its social landscape." In S. G. Jones (ed.), *Virtual Culture: Identity & Communication in Cybersociety*. Sage, p. 12. また、イニス, H. A. (久保秀幹訳)『メディアの文明史——コミュニケーションの傾向性とその循環——』新曜社, 1987.
- 4) けれど、インターネットの発端である ARPANET が冷戦下の存続のための技術として開発されたことを思えば、インターネットに「永続性への傾向性」を指摘することは一面で正しいといえる。
- 5) Global Information Infrastructure. 1994 年の国際電気通信連合総会でゴ

ア副大統領が提唱した。各国の高速情報通信ネットワークを地球規模で連結しようというもの。

- 6) Morley, C., & Robins, K. 1995 *Spaces of Identity : Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*. Routledge.
- 7) 遠藤薫 1998 「インターネットと国際関係——グローバル世界の力学——」
高田和夫 編『国際関係論とは何か——多様化する「場」と「主体」——』法律文化社, pp. 71-95.
- 8) Watson, N. 1997 "Why we argue about virtual community : A case study of the phish.net fan community." In S. G. Jones (ed.), *Virtual Culture : Identity & Communication in Cybersociety*. Sage, pp. 102-132.
- 9) スプロウル, L., & キースラー, S. (加藤文夫訳)『コネクションズ——電子ネットワークで変わる社会——』アスキー出版局, 1993 ; Garton, L., & Wellman, B. 1995 "Social impacts of electronic mail in organizations : A review of the research literature." *Communication Yearbook* 18 : 434-453 ; Lea, M., O'Shea, T., Fung, P., & Spears, R. 1992 "'Flaming' in computer-mediated communication : Observations, explanations, implications." In M. Lea (ed.), *Contexts of Computer-Mediated Communication*. Harvester-Wheatsheaf, pp. 89-112 ; McLeod, P. L. 1992 "An assessment of the experimental literature on electronic support of group work : Results of a meta-analysis." *Human Computer Interaction* 7 : 257-280 ; Walther, J. B., Anderson, J. F., & Park, D. 1994 "Interpersonal effects in computer-mediated interaction : A meta-analysis of social and anti-social communication." *Communication Research* 21 : 460-487.
- 10) Short, J., Williams, E., & Christie, B. 1976 *The Social Psychology of Telecommunication*. John Wiley ; Rice, R. E., & Love, G. 1987 "Electronic emotion : Socioemotional content in a computer mediated communication network." *Communication Research* 14 : 85-108 ; Rutter, D. R. 1987 *Communicating by Telephone*. Pergamon ; 相田敏彦 1990 「パーソナル・コミュニケーションとニューメディア」竹内郁郎・児島和人・川本勝編『ニューメディアと社会生活』東京大学出版会, pp. 167-189.

- 11) Kiesler, S., Siegel, J., & McGuire, T. 1984 "Social psychological aspects of computer-mediated communication." *American Psychologist* 39: 1123-1134.
- 12) Lea, M., & Spears, R. 1995 "Love at first byte?: Building personal relationships over computer networks." In J. T. Wood & S. Duck (eds.), *Under-
Studied Relationships: Off the Beaten Track*. Sage, pp. 197-233; Spears, R., & Lea, M. 1992 "Social influence and the influence of the 'social' in computer-mediated communication." In M. Lea (ed.), *Contexts of Computer-Mediated Communication*. Harvester-Wheatsheaf, pp. 30-65
- 13) Wilkins, H. 1991 "Computer talk: Long-distance conversations by computer." *Written Communication* 8: 63-192.
- 14) Herring, S. C. 1993 "Gender and democracy in computer-mediated communication." *Electronic Journal of Communication* 3 (2) [<http://www.cios.org/www/ejc/v3n293.htm>]; Rosenberg, M. S. 1992 "Virtual reality: Reflections of life, dreams and technology. An ethnography of a computer society." [http://www.cpsr.org/cpsr/sociology/mud_moo/ethnography.txt]
- 15) Lea, M., O'Shea, T., Fung, P., & Spears, R. 1992 "'Flaming' in computer-mediated communication: Observations, explanations, implications." In M. Lea (ed.), *Contexts of Computer-Mediated Communication*. Harvester-Wheatsheaf, pp. 89-112.
- 16) Walter, J. B. 1992 "Interpersonal effects in computer-mediated interaction: A relational perspective." *Communication Research* 19: 52-90; Walter, J. B. 1993 "Impression development in computer-mediated interaction." *Western Journal of Communication* 57: 381-398; Walther, J. B. & Burgoon, J. K. 1992 "Relational communication in computer-mediated interaction." *Human Communication Research* 19: 58-88; Parks, M. R., & Floyd, K. 1996 "Making friends in cyberspace." *Journal of Communication* 46: 80-97.
- 17) 安川一 1997 「ネットワーク」『マス・コミュニケーション研究』50: 72-79
- 18) van Gelder, L. 1985 (October) "The strange case of the electronic

- lover." Ms. (In Lea, M., & Spears, R. 1995 "Love at first byte ? : Building personal relationships over computer networks.")
- 19) Goffman, E. 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*. Anchor ; 安川一編 1991『ゴフマン世界の再構成——共有の技法と秩序——』世界思想社.
- 20) CMC のフィールドワーク的研究からもたらされた成果として, McLaughlin, M. L., Osborne, K. K., & Smith, C. B. 1995 "Standards of conduct on Usenet." In S. G. Jones (ed.), *Cyber Society : Computer-Mediated Communication and Community*. Sage, pp. 90-111 ; Baym, N. K. 1995 "The emergence of community in computer-mediated communication." In S. G. Jones (ed.), *op. cit.*, pp. 138-163 を参照. また, 以下も参照のこと. Dorst, J. 1990 "Tags and burners, cycles and networks : Folklore in the telegraphic age." *Journal of Folklore Research* 27 (9) : 179-190 ; Baym, N. K. 1993 "Interpreting soap operas and creating community : Inside a computer-mediated fan culture." *Journal of Folklore Research* 30 (2/3) : 143-176. さらに Jones, S. G. (ed.), 1997 *Virtual Culture : Identity & Communication in Cybersociety*. Sage. 所集の各論文には, フィールドワーク的研究が反映されている.
- 21) Lea, M., & Spears, R. 1995 "Love at first byte ? : Building personal relationships over computer networks." In J. T. Wood & S. Duck (eds.), *Under-Studied Relationships : Off the Beaten Track*. Sage, pp. 197-233.
- 22) 以下の文献には, C. Calhoun が再構成した「関係」概念をふまえた CMC における社会関係概念の再検討が試みられている. Lyon, D. 1997 "Cyberspace sociality : Controversies over computer-mediated relationships." In B. D. Loader (ed.), *The Governance of Cyberspace*. Routledge, pp. 23-37. また, Calhoun, C. 1992 "The infrastructure of modernity : Indirect social relationships, information technology, and social interaction." In H. Habermas & N. J. Smelser (eds.), *Social Change and Modernity*. University of California Press, pp. 205-236. を参照のこと.
- 23) Fernback, J. 1997 "The individual within the collective : Virtual ideology and the realization of collective principles." In S. G. Jones (ed.), *Vir-*

tual Culture ; Identity & Communication in Cyber society. Sage, pp. 36-54.

また、CMCをヴァーチャル・コミュニティとして論じた研究として、以下を参照。Jones, S. G. (ed.) 1995 *CyberSociety : Computer-Mediated Communication and Community*. Sage ; 遠藤薫 1998「仮想性への投企——バーチャルコミュニティの近代——」『社会学評論』48(4): 438-452.

- 24) 典型的にはラインゴールド, H. (会津泉訳)『バーチャルコミュニティ』三田出版会, 1995. もっとも、外敵に対する共同防衛機構としてのコミュニティという発想をもちこむと、私たちが通常発想する村落共同体的イメージは多少修正をせまれるかもしれない。Morley, C., & Robins, K. 1995 *Spaces of Identity : Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*. Routledge. を参照のこと.

(一橋大学社会学研究科助教授)